



序

時に西暦一八六七年。

後に幕末と呼ばれるその時代。

『大政奉還』。

千年の時を紡いだ武士の歴史は、武家最後の頭領となった徳川慶喜公の御決断により、幕を閉じることとなる。

これと共に、侍という身分、武士という存在までもが消滅する筈であった。

しかし將軍慶喜公は、政権の返上にもなう“条件”ともとれる望みを申し上げ奉った。

進言いわく――。

「幕府による まつりごと 政の終わりに伴い、『侍』ひのものとくに という身分も新しい時代には無くなる事となりましょう。しかし、この日本国を、その歴史を拓き、築き、支えてきた武士。ならびに彼等の魂とは、この日本の確かなる精神そのものでございます。そしてその魂は、古来よりこの国の神器でもありますれば、その魂である『刀』と、これを振るう者達をこの日本の民の心に脈々と受け継ぎ、後の世に遺してゆくことを、何卒お赦し願いたい」……と。

そこには、幕府の抱える二万を超える臣下と、それに類する徳川の民を活かす為の策という思惑もあったのは確かではある。しかし朝廷は、体制転換後の戦を避けることと、幕臣たちの処遇に関しての妙案であると肯き、この願いを聞き入れることとした。

また何よりも、刀と魂を共にして来た者達の“拠り所”を――心の在り処をカタチにするべき、との天慮が賜られた。

こうして、武に生きる者を遺し活かすという御心の、その進言は叶えられることとなった。

かくして『大和の魂を体現する者達をこれからの世にも遺す』という斯様な大義の下、江戸周辺の幕府直轄地、『常州』『総州』『房州』『相州』そして『武州』の関東一円は、幕府という拠り所を失った幕閣諸氏、士階級の武士達、そして武を頼りに生きていた浪人や侠客などが集まり、自治

第一章 太刀の壱

区としてひとつの郷となった。

こうしてここに、『刀』に生きる者達の国土――

『刀郷』^{とうきょう}が発生した。

かつて――『人斬人形』と字名された少女が在った。

『心』の無い人形の如くの少女は、雪降る中、産声をあげた。

白い雪の様に、何物にも染まり得る純粹にして、無垢な『心』を育み始めた少女。

人は言う。彼女は、彼女の母となった女侠の瞳に、『彩』^{いろ}を視た――確かな『彩』を魅た、と。

あたかも『華』が息づいているかの如く、泥に穢れようとも清らかに輝き、咲き誇る。そんな華を魅たのだと。

其の華は、揺籃の少女にあらゆる可能性を示し、幼子である彼女は芽生えた『心』のままに、己が生を謳歌する。

ある時は、温かな陽光の輝きあらんばかりの、明朗たる貌を見せ、時に荒れ狂う風のような激情を顕し、またある時は痛みに耐える哀れな女の子。

揺れ打ち震える感情が、少女の頬に溢れ出る『心』を煌めかせる。

少女に課されたモノが彼女を揺り動かして離さないのは、『心』があるが故。まぎれもなく、少女が『人』である証。

かつて『人形』であった少女――彼女が『人』と成り得た『心』は……その身の内に積り重なる、生きた跡は、今彼女に何を視せるのか。

盛夏の果てに、巡り巡る命の結果点を迎えた少女は、その『心』で思う。

「母さんは、獅士堂には『必定』がある、と口にしていた。

『必定』とは、逃れ得ない流れだそうだ。

けれど私は、そんなモノを信じない。少なくとも私は、絡みつく『必定』というモノに抗い、新たな季節^{しだい}を探しているから。

第一章 太刀の壱

己が心の求める光の射す方向へ。僅微な歩みであろうとも、目指し続ける。

それは、鮮やかな憧^{きおく}憬が突き動かしている。

母さんがくれた言葉がある。

心に刻まれた言葉たち。

私を突き動かす力。

大切な人が遺した、私にくれた想い。

もたらされたのは、あまりに温かな記憶だった。

私の手が――心が、激しく振るう刀を交えた刻がある。

けれど、修羅が気持ち和やかに人として会話を交わした刻も、また真実で。

優しく髪を梳いてくれた、その温もりも、また真実で。

あの人を思い返すと、みな温かくて、私の心は、温もりでほどけて――そんな風に口にしてしまう自分があるけれど。

あなたが、遠くにいつてしまった今でも、思うことを止められはしないけれど。

けれど、あの人^の記憶とは、私にとって、深い深い、痛い痛い哀しみの記憶と共に在る。

これは、私の瞳がまだ “緋色” を宿していなかった頃.....あの人と共に過ごした僅か二年にも満たない時間の、その愛の心と、傷の痛みの記憶.....」

そんな季節の史篇。

第一章 「オトメスズカケ」

1

——悪夢をみた。

彼女は酷く辛くて、憤ろしく、息辛く、生き辛い……最後には尋常ではない胸の痛みを感じた気がした。

それは自分が原因でもあり、またやはり誰かの所為でもあり、それでいて、自分がナニモノにも触れて変えることをしなかったという、ごくありきたりな良くない在り方が原因であると、ユメウツツに確信している。

『私』は何をしていた。

そう。『私』は殺し続けていた。

刀を振るい、人を斬り続けてきたのだ。

けれどこの場合、真の意味で自らに不行跡だったのは、行動よりも、精神であっただろう。

何も感じず、何も思わず。只、命じられるままに。

さながら、人形の如く。

『人斬人形』——そう字名されているユメの中の自分。

しかし、その事すら、ユメの中の『私』は何ら思うこともなく、只々、刀を振るい、人を斬る。

何が『私』をそうまで駆り立てるのか。

機械的に、刹那的に、無情的に。感情なく……心無く。

人を斬ることに、何らの痛みを感じない。心が薄く、薄く、ごくか細い。

ユメの中の『私』は、そんな自分を省みることも無く、只、刀を振るい人を斬ることを、無暗に繰り返す。まるで四肢を操り糸で統制された哀れな人形だ、とそんな風に思う事すらない、無感情で。

只、そう。聴こえていたのだ。

『私』の耳の奥——頭の芯に訴えるように、狂おしく叫ぶかのように、聴こえていた『声』。

第一章 太刀の音

さながら暴雨風のように。さながらモノが砕け割れ続けるように。さながら絶え間ない怨嗟の念のように。

その『声』が、『私』に対して、人形である事にも心の無さにも、疑問や感傷といったモノを抱かせる暇いとまも与えずに、身を突き動かし、手に在る刀を振るうことをさせ続ける。

そうして、そして。斬って。斬って。斬って。斬って、斬って、斬って、斬り続けて——人を殺し続けて。

何かを視て——知ってしまった。

とても美しいモノだった。

この酷薄に彩られたユメの中に在って、酷く鮮明で、明るくて、どこか温か気なモノ。

……少なくとも『私』は、それまでの生において断言して未知であると言える、そんなモノを視た。

だからこそ、その存在をはっきりと認識した。

抗い、逃れようともがく、あらゆるモノへの否定と、受けるモノへの苦しみの渦中である、悪夢の中で。

視て——魅せられた。

血の河となる足場。そこに立つ、人形の如くの『私』。暗い、どこまでも昏い目つきをした幼い少女が刀を携え、立っている。

それがかつての自分だと、ユメをユメだと認識しだして『私』は思い出す。

心無く刀を振るう事。

心無く人を斬り殺すこと。

心無く生きる自分の——自分のセカイの、酷く哀しく、辛く、憤ろしさに満ちた様を。

だから斬った。

斬り捨てた。

かなぐり捨てて、振り払い切り、振りほどく様に。全力で。必死に。痛みに満ちた自らの『心』に鞭打って。

そうして。なんだろうかと思う程に、目の前が白く、明るく温かなモノに満

第一章 太刀の壱

たされて……。

そんな 『ユメ』 をみた。

目が見開かれ、四肢が喘ぎ、助けを求めるように身を乗り出した。

呼吸が荒く、肩で息をしている。全身に汗が噴き出っていて、肌着が冷たい。

両手で頬や、脛、額をさする。髪にも触り、指を通す。梳いてもらった髪。

周囲を顧みて、幾分見慣れた自分の部屋だと確認する。

布団の柔らかさと肌触りと温もりとを感じる。

自らの呼吸。身に感じる冷やかさ。

そうして漸うと、彼女——坂本雪絵は目覚めを自覚する。

この場合の 『ユメ』 とはなんであろうか。

ユメとは、寝て見るユメ。起きて現実で見るユメ。夢想の中だけでみる絵空事。時によって——在り方によって様々だ。

しかし、『悪夢』 となればそれは、まず現実で見るユメや絵空事が、多く人の心の内の“希望” のカタチであるのならば、それは制統されて然るべきで、ならば 『悪いユメ』 とは、大概に人の手に余る“まどろみ” の最中のモノ……気の間違いのようなモノであると言う事が出来るのではないだろうか。

だから彼女——朝の柔らかな陽光が射す一室で、肩を上下して乱れた呼吸を取り戻そうとする、一人の少女——雪絵のみた 『悪夢』 とは、その不可解で不確かで、けれど嫌悪感をありありと抱く確かさを以って、現実では在り得ないユメ、現に非ざる夜の遊迷^{ユメ}だと知れる。

そして、雪絵のみたこのユメは、彼女の記憶の一部だ。

「忘れるわけがない……忘れるつもりも無い。そんなこと、わかっている」

けれどね、と雪絵は自らがみたユメが呼び起こす、過去の住人達に思いを馳せる。

同じ釜の飯を喰らい、寝起きを共にし、技を磨き合った。

その交流の中に、人間らしい機微というモノが、記憶を辿っても僅かばかりであったとしても、それでも“あの子たち” を斬る理由はなかった筈だ。雪絵はそう認識している。

第一章 太刀の音

ならば何故、“あの子たち” を斬ったのか。

雪絵は、自らの生にとって必要だったからだ、そう考える。

犠牲になってもらったなどという感性は雪絵にはない。“あの子たち” を糧に生きるという程に強^{したた}かな姿勢でもなかった。ならば何故、あの時——あの雪降るなかで、雪絵は同朋の少女達を斬ったのか。己が意思で刀を振るい、斬ったのか。

あれは、観測する者によっては、『禊』 のようなモノだったととるだろう。

生き方と行動と、意思までのすべからく、自他の生殺与奪をすべからく操られていた 『人形』 であった雪絵が、操り人形の糸を断ち切り、自律し自立する。その為に必要な儀式であったと。

事実、雪絵があの時少女達を斬った行動は、雪絵が自らの意思で、自らを操る者達に叛逆を起こしたモノだった。

自分が求める在り方になるために。

否。その時はもっと単純に、自分の心無い有様がどうしようもなく嫌だった、という気持ちでいっぱいだったのだろうけれど。

だがそれでも、あの時の叛逆が、自らに芽生えた 『心』 の指す方向に従ったのだとしても、雪絵はあの少女達を斬ったことを痛む気持ちがある。心痛み.....死を悼む気持ちがある。

だから、過ぎ去った事だとはいえ、現在の自分の周囲の人間がそれを必要がないと言ったとしても、雪絵は “あの子たち” の事を忘れまいと思っている。

例えそれで、時に悪夢に苛まれても。

それは自分が背負って行かなければならないモノだ。そう思う。

雪絵が背負うモノの一つだ。彼女はそう了解している。

一呼吸の後、雪絵は立ち上がる。乱れた髪を軽く梳き、自らの居る部屋の中に視線を巡らせる。

この部屋で寝起きをするようになって、一つの季節が過ぎた。その間に雪絵が手に入れて増やしたモノなど、この部屋には数えるほどしか置かれていない。部屋に元々あった古い和時計。着物掛け。自分の布団と枕。小さな文机と手鏡、家人に貰った櫛（割と可愛らしいのが好印象）。お下がりの着物が数点、着物

第一章 太刀の壱

箆笥に納められている。そして部屋の一角にある刀掛け。

二振りある日本刀。上に在るのは若葉色の柄紐の打ち刀。もう一振り、鞘に黒い染みのある刀は、あの雪の日に雪絵がそのまま持ち帰った品である。

良業物であるその刀を手にとると、瞼を閉じる。雪絵はそうして、ことあるごとに思い出す。自らが人形であった頃の、かつての自分のスガタを。――光の欠片もなく、陰惨であったスガタを。

思い出すにはそれほど昔の自分でもない。その記憶は思い返しても空恐ろしい自分が居る。だから自分のことながら、思い出すのが辛くもある。

そしていつも思う。あのままで、人を斬るだけの心無い人形だったら、と。そんな生であったらば、それまで他人にそうしてきたように、自分もいつか斬り果てて死ぬことだったろう。

否。今現在とて、その終着自体は然程変わってはいない。

それでも、そこに……自らの振るう刀に、如何ばかりの『心』が伴わないままだったならば、そんな生の続きに――命に、どれ程の意味や価値があったただろうかと。

思うに心が凍える話だが、人形のままだったならばそんな事を思う事もなく死んで逝ったのだろう。それを考えると、恐ろしくて刀を手にする指に力が込められる。

自らを縛る、植え付けられた生きていくルールと言うべきモノ。かつての心無く人を斬るとは、そういうモノだった。

そんな雪絵を変えたモノとは、心無い少女を変えたのは、至極心を以って顕れるスガタ――その美しさ。

それは、雪絵にとっての心の大きなモノ……信じるモノとなった。

その為になら、生きていられる。辛く哀しい記憶と共にあっても、その記憶を形作る者達を記憶に留めて続けても、自らが何モノかに苛まされていたとしても。

だからこそ、こうして美しさの記憶と共にある、胸の痛みを噛み締める。

これを『哀悼』というのだと、雪絵はまだ知らないのだけれど。

そうして瞳を開けて、雪絵は自らの今置かれる環境での生活と向き合うべく、今日の一日を動き出した。

黒い染みのついた刀を、静かに、労わるように刀掛けに置く。汗をかいた寝間着襦袢を脱ぎ、稽古着を纏う。髪を一房に結び窓を開けた。陽の光が射しこむ。

「私は、刀を振るう事を――一刀で生きていく事を心に決めている」

雪絵は、自然に口をついて出た言葉に頷き、刀を振る。

2

刀郷――そこは、かつての武士の在り方を遺す者達によって生が営まれる地。ことに社会体制の変遷により、『彼ら』によって顕わされるその在り方というモノは、封建忠義ではない。『彼ら』によって為さしめられるのは、武を修め、人間としての精神性を律し、高める……そしてその顕現として、魂のカタチともいべき『刀』を振るう事である。

そうした在り方を、現代に生きる人間達が体現している。

そんな『彼ら』の生きていく生業として、刀郷はその発生から無頼の徒、侠客によって秩序が成さしめられてきた。その倣いは、かつて明治維新後に刀郷が発生して後、この郷に現れた大きな力を持つ二つの家によって礎が築かれた。そして今に至っても『彼ら』を続べ、導き、その二大家によって刀郷は安定と平穩を保っている。

その『彼ら』とは、武を以って無頼を制し、堅気の衆の畏敬を集める侠勇――『武俠』たちだ。

東に “無敵の水辰” すいしん たつのかみ 辰ノ神一家。
西に “最強の獅子” ししどう 獅士堂一家。

郷の総人口の大半を占める任侠者達は本来、構造的に郷内で、武俠よりも立場が優位に類する。にも拘わらず、その任侠組織を従える武俠の組――それが東西の二大家だ。

任侠者の組と武俠の組とで、一体何が違うのか？ と郷の堅気にもそう思われることもあるだろう。これはこの郷においての一般市民であるところの堅

第一章 太刀の壱

気の衆でも、その違いに区別をつけない者もそれなりの数に登る事柄なのだ。

しかしここで、その違いについて簡潔に述べるのならば、それは読んで字の通りというか、字面の特徴に顕れているイメージが強い、というのが実際だろう。すなわち『任侠』は、古くからの言葉通りの侠客、ヤクザ者達を指し、『武侠』は『武』——ことにこの郷においての武の最大顕現である『刀』を振るう者達を指して言う。

両者に共通するのは、この郷には寄る辺というべき秩序を与える存在はもとよりないとはいえ、それを措いても己の力以外に頼らない、という在り方くらいだろう。

侠客、武侠は、自分達の力を頼みに己が生を歩む。

侠客と武侠の関係と均衡は、構図としては任侠者の縄張りである“シマ”の間での抗争のコマとし武侠は駆り出される。その中に在って辰ノ神と獅士堂の二大家が、任侠者よりも上位として郷を治めているのは、彼らは侠客に使われない独自の体制を採っているからだ。そして、それを成立させるだけの組の構成員と、なによりも圧倒的な『刀で成す力』を誇っているからだ。

そう。故に武侠達は刀を振るう。

それが彼らの生業の主旨にして主題。

かつての『刀郷の発生のころ』と、自分達が斬尖を向け合っているという事を、彼らは無自覚に自覚して。

今日も刀郷の東と西の二大家のシマでは、白刃を閃かせ、刃傷血風の殺陣回りが繰り広げられている。

その太刀風舞う風景の一つ。

ここは江戸城を境にした郷の西側のシマ——その一地区、武蔵野。

威風堂々にして荘厳然とした武家屋敷。周辺には、古くからの風情を色濃く残した緑が多く、野鳥が春のうららかな空と、温かさにしたがって競って花開いた季節の草木との間を飛び交っている。

そこに空を裂くかのような気合の音が轟く。無骨な太い声。

一つ——二つと、声はまた幾重にも連なり、それに追隨して木を打ち鳴らす音が折り重なる。気合の声は打木の音と重奏となって、穏やかな空にこだまする。

第一章 太刀の音

鳥たちも、木々も、草花も、空も風も——それを当たり前のように享受して、彼らの営みは自然のままだ。

意気裂帛たる声と音は、広大な屋敷の内から響いてくる。

道行く堅気の衆や、鈴をつけた白い猫などが屋敷を囲う外塀に視線を向ける。威厳をもった屋敷の表門に目を遣ると、そこには華を象った銀物が煌めいている。

ここは獅士堂の組邸宅である。

正門の奥から聞こえる声と音は、早朝の陽が昇って間もなくから、こうして鳴り響き続けている。正門より奥に目を遣ると、母屋と周囲の別棟を繋ぐ石敷きの道には、脇に花が点々と咲いている。まるで訪れる者を迎え入れているようだ。

しかし、こうして可憐に咲く花たちとて、この組の在り様を知っている。

——この声と、音の正体を知っている。

花が風にそよぎ、揺れる。

それは道の先にある建物から届く、烈気の声と、交わされるカンツ カカンツ カカカンツ という木打ちの音に対して、まるで歓喜の舞いを舞っているかのようだ。

花たちはその美しさで見た。

幾人、幾十人という男達——俠達が木刀を手に、防具も付けずに組内試合をしている光景を。

花たちは知っている。ここは獅士堂の本拠地。その武の鍛錬場。刀技の修練道場。

『春の花』 という名を持つ、この地の主——坂本春花は、意気軒昂と気合十分に躰を躍らせ、声を発し、木刀を振るう俠達……愛すべき組員達を見遣り、頷き、微笑む。

今日も刀郷が、そして獅士堂一家が太刀風と共に在ることを喜んでいるかのよう。

頭梁の満足気な笑みに、更なる力を漲らせて、俠達は刀を振るう。

「「えあア呀ッ!!」」

第一章 太刀の壱

軽やかにして剛の太刀。

下段から繰り出し、返して突き刺さるように打ち込まれる技。その少女の一撃は、寸分たがわずに、そして石火の勢いで太刀合う侠の身へと炸裂した。

後ろで馬の尻尾のように束ねた黒髪が、踊る躰に合わせてキラキラと美しく舞う。苛烈な踏み込みと鋭利な技の繰り出しで、白い道着と袴が激しく踊る。少女の身の薫香に酔う隙など与えない振り上げて打ち込んだ木刀は、しかし相手の身に喰い込まずに、寸前で止められていた。

見極めの審判員の役割をする侠が、黒髪の少女の勝利を告げた。

鋭い目つきで刀を戻すのは、雪絵である。

彼女が涼し気というよりも、どこか冷ややかな態度で太刀合った侠と距離をとると、周囲に居た数人の侠が雪絵に声をかける。

「さすがだな雪絵。次は俺と手合せしてくれ」

「いや、雪絵ちゃん。俺にこの前の再戦をさせてくれ」

「いやいや、お雪ちゃん。是非俺と手合せを！」

次々と太刀合いの申し入れをしてくる男達に対して、雪絵はじりじりと、しかしそれと判らないような絶妙な動きで彼らと距離をとっている。そして男たちが「何故そんなに遠くに行くんだ？」という顔をするくらいに間合いを空けると、ようやく一息をついて、そしてどこか苦い貌をして首肯し、「じゃあ」と一人の侠を指し示す。

見事雪絵の対戦相手に選ばれた侠は、喜色満面。他の侠達は至極がっかりとした顔で、その男同士での試合をしようと離れていく。

問答をしている間に他の組の審判をしていた男に代わって、近場の手隙の侠に審判員を頼むと、その合図で雪絵と侠が刃を交える。

雪絵の構えは躰を半身にした下段脇構え。変化に富み、相手からの打ち込みを待つ事に強みを見せる向きを持つ刀技のスタイルだ。

そんな雪絵の稽古の様子を、ちらちらと視線を遣って気にしているのは、春花だった。こちらも道着に身を包んでいるが、袴を穿かない着物姿だ。乱れたら困りそうな裾で稽古場に居る。

先程から春花は、雪絵の刀技と黒髪と、瞳と、太刀合いの後の挙動などの一挙手一投足を目で追っていた。

第一章 太刀の壱

「どうにもな具合だな、お前は。相変わらず」

肩をびくりと強張らせて、春花は声の方に視線を巡らせる。

「.....白峰さんか」

道場に這入ってきた白峰が、春花の方へと歩み寄って来るところだった。

「竹刀組の指導の具合はどうかしら」

「まあ、悪くはないな。付き合っただけ竹刀を遣うのも、手の内の刺激になって良いモノではある」

「防具を着けるのまで付き合うのは、少し面倒そうよね」

「初心を忘れん為には、たまには良いことさ」

髪の色に白が混じり出した、壮年の終わり頃といった貫禄のある年齢の男。

この組では最古参に部類する歴戦の武俠。それが白峰だ。

訓練の道場では、実力に伴って稽古の場所と内容を区別している。この組での生活と修練、そして武俠としての経歴の長い白峰は、その指導の役目も担っているのだ。かつては白峰も、そして彼の後輩にあたる春花にも、この組の道場で防具を着けて、竹刀を手に稽古を積んでいた時期がある。そのことを思えば、白峰の言っていることも肯ける。話の流れとしても自然だ。

しかし。

「ふむ。やはり腕前は立つな、雪絵は。大したモノだ」

「.....そうよねえ」

稽古場の喧騒の中、春花と白峰の視線の先では、またしても雪絵が鋭利な技の冴えで勝利をおさめていた。しかしその直後は、さっと相手から.....また審判員からも一定の距離をとって離れてしまう雪絵だった。

「しかし、相変わらずあれか」

「そうなのよねえ。もう、可愛い困ったちゃんよね、あの子は」

頬に右手を当てて、ほう、と吐息を漏らす春花だったが、瞬間、ビクリッと左手に下げ持つ木刀を震わせて白峰を睨み据えた。顔がどう見ても動揺していた。

「気になるなら気になるでよかろうに。お前も態度が変というか、妙に気を使っとるなあ」

どうやら春花は、雪絵を気にして視線を送っていた事を、周囲に気取られま

第一章 太刀の壱

いと頑張っていたようである。うまくはっていなかったようであるが。

「いや、まあね。うん。そうなんだけれど.....私にも立場がありますからね」
ふう、とまた嘆息する春花。

白峰は苦笑するように目を伏せて、そして話題を戻してきた。

「雪絵はまだ、自分の間合いに人を入れるのが苦手か。しかしそれでも、少しは嫌がり方も丸くなってきたとは思うが」

「.....ええ、そうなんです。刃圈、でしょうね。常在戦闘に近い精神状態を訓練で植え付けられた.....あの子のこの間までの生活が、如何に悪環境であったかという証左なのだけれど.....」

憂いを帯びた顔で思い出すのは、彼女の来歴だ。

「これは難しい問題だからね」

「一朝一夕に多くの者達と同じようにしろというのも、あいつには無体ということか」

「この手の事は、他人の情でどうにかなるとも思えないし、慣れる時間に任せるしか出来ないわね」

懐手で顎を手でさすりながら、白峰は思い起こすように言う。

「来たばかりの頃は、これだけ男衆が轟めく道場での立ち回りに、あいつは相当気が立っておるようだったな。後じさって間合いを取る常の雪絵を面白がって、五、六人で周囲を囲んで詰め寄ったら、一瞬で木刀を振るって全員に一撃を見舞ったという事もあったな」

それで怪我を負った組員や、その様子を見ていた者達に、良い意味でも悪い意味でも雪絵は印象を強くした。

「でもあの後、更に悪気がさした組員があらしこ作男をけしかけて、あの子にちょっかい出させたら、近づくさまからその腕を強かに打って、その作男は腕を落とさなければならない怪我を負ったのよね」

そんな事があったから、雪絵は組員達にとって、武侠たちにも、奉公人にも近寄りがたい存在だと認識された。つまり距離を置かれるようになった。それはままこ継子扱いに至らずとも、畏れと奇異の目であったのは間違いない。

しかしそういった問題点を抱えながらも、こうして毎日欠かさずに朝夕と道場に詰めて、多くの人間と交錯していることで、そんな雪絵も少しずつではあ

第一章 太刀の壱

るが、順応を見せ始めている。

まだ危なっかしいところがあり、春花の心配の目配りが絶えることはないけれど。

「まあ、なにせよ、武侠の組内で腕が立つという事は、それだけで雄弁に己を語ることだ。そう気を煩わせることもあるまい」

そう、なによりも組員は根っからの武刃者たち。水際立った業前である雪絵に対して、突き離し捨て置くどころか、徐々に親近感を以って呼び、接する者も増えてきている。皆、姐さんが連れてきた若い娘に興味津々なのである。

「……そうね。あの子の周りの侠達を、もっと信用してあげないと、かしらね」

そうしていると、木刀を肩に担いだ作務衣の男が雪絵に歩み寄り、話し掛けた。

覆い被さるようになじり寄る男に、雪絵は自然に間合いをはかりながら視線を向ける。そして表情を変えずに、幾ばくか慣れた風に対応した。

「またあなたか、黒原さん。……今日は何本勝負ですか」

「いつも通り五本だ。てめえ、今日は俺が勝ち越すからなッ」

唐草というよりも、ネイティブアメリカンのタトゥーのような模様の入った服が、道場の中で一際目立っている——というには、彼は日常的にそうした出で立ちをしているが——黒原。彼と雪絵、この二人の試合が行われるという事で、二人の周囲の侠達が一旦手を止め、視線を向けた。

それもそのはず。

頭梁である春花姐さんが連れてきた、まだ幼い少女でありながらも、木刀稽古のこの場で常勝を誇る優れた業前の雪絵。そして現四聖の白峰の直弟子の一人にして、次期四聖候補としての実力を備えた、若手期待の武侠、黒原。

この二人の対戦は、雪絵が組に現れてからここまで、黒原の一方的な敵愾心のようなモノのお蔭で、月に二、三度は見られる対戦カードだ。雪絵は年齢を感じさせない、既に完成の域にある刀技で初めから強さを見せつけているが、黒原も自らにかかる期待や、己の誇りにかけてか日々研鑽を積んでいるようで、二人が太刀合う度に周囲は、彼女たちの実力伯仲の加算を感じさせられる。

その二人の（やや一方的な）火花が散る。

多くの組員が見守る中、試合の合図と共に黒原からの打ち込みが放たれる。

第一章 太刀の壱

その技は雪絵の下段脇構えという 『迎え撃つ』 スタイルに伴う 『振り上げる』 という一挙動——その隙を突く打ち込み。

そうした技を相手が繰り出してくることは、雪絵も織り込み済みで採っているスタイルだ。黒原でなくとも、腕の立つ者ならばそうしてくることを雪絵は心得ている。

「ちっ、相変わらずその構えか。生意気だっって言ってんだろオがよ、こら雪」
「……………私の勝手でしょう」

眉間に皺を寄せて、邪悪な貌を作ってあからさまに牙を剥く黒原に、しかし雪絵は動じずに静かなモノである。彼女は太刀合いの、刀が彩る世界に専入している。

相手が打つ、という意を汲めれば、^{がっしうち}合撃ちの機を合わせるのもうまくいく。

黒原の振り下ろす木刀に自らの刃を這わせ、そのままの勢いで斬り込む、諸流に見られるような受け流しの技だ。しかし技としてありきたりであっても、それを直で刀を交わす刹那に、どう振るい顕わすかで刀技の練熟の差が出る。

この時の雪絵の技の冴えに、周囲は息を呑んだ。

身に突き刺さる寸前で止められた木刀が、雪絵の一本先取を告げた。

「くそっ ……姐さんの真似をしているのが生意気だっって言ってんじゃねえか。調子ぶってンじゃねえぞ！」

(……だから、あなたには関係ないでしょ)

そう思う雪絵だったが、どうもその思いは口から出ずに、木刀を振るう意識が強まる。

彼女にとってはいつもこうだ。

胸の内に何かの気持ちが湧きあがるが、それを刀で技を繰り出すのと同じように、するりと口に出して表に出すことが出来ない。

春花と出逢ってから、胸に衝動的な感情の昂ぶりを憶えることが、雪絵は度々あるように思う。けれどそれが、手と軀を躍動させて刀を振るうという 『意』よりも先に、ありありとした言葉となって口から出たことは実は少ない。

何故だろうと考えることはままあったが、出ないモノは出ないとしか言えない。

あの郎党をすべからく斬り伏せた、雪降る庭での一件。あれをとってみても、

昂ぶる感情を刀を振るう事で発揮し、発散したにすぎない。

いや、むしろあれは“撒き散らした”という結果を生んだ。

それは雪絵にとっては苦い経験の一つだ。それでも今こうしてまだ自分は、言葉というモノが拙い。己の想いを、ただ刀を振るうことで顕わしている。

己の意を撒き散らすことしか出来ない。『心』を人に向けることに、拙い。

二人の試合を見守る春花も、白峰も、雪絵がそうしたことにフラストレーションを抱いていることを、実はよく知らない。

『人斬人形』を率いていたかの暗殺組織に所属していた雪絵が、この組に来て四カ月ばかり。雪絵は、そうした言葉に出来ないがために口をつぐんでいて、口数が少ない種の間人だと、組の皆に認識されているからだ。

しかし、雄弁な言葉にならなくとも――『想い』はある。

確固として、雪絵という少女の胸の内には感情と気持ちがある。それは春花から贈られ、獲得した『心』というモノがあればこそだ。かつての心無い人形であった頃の彼女には、到底できない事。抱きようのないモノ。

その『想い』が、雪絵に“生意気”と取られる行為をさせている事を、よく知る者は現在数少ない。

(慕ってくれている、ということなのかしらね。それとも、あれが刀の申し子らしい、私を視るとということなのかしら)

春花は雪絵の刀技を――構えを視てそのように思う。

きっと雪絵は、春花がそう思っていると知ったら、是が非でも開かない口を……出ない声を無理矢理にでも出して、必至に振り絞って、想いを口にする事だろう。

あふれる想いを、ありったけの気持ちを、それを与えてくれた人に告げるだろう。

『私はあなたのように刀を振りたいから、真似てみているんだよ』

と、ありったけの今の気持ちを……自分が魅せられた気持ちと、名をくれたこと、刀に意味をくれたこと、そして、心をくれたこと……そうして坂本春花が自分の『憧れ』になったこと。その想いの丈を口にする事だろう。

けれど、今の雪絵はそうした豊かで雄弁で、積極性に溢れる情緒は、幾分持ち合わせていない。だから今は、刀を振るうことで自らの『心』が示し顕

第一章 太刀の壱

わす 『想い』 を我武者羅に発散させる。

審判役の声が、雪絵の一撃による勝利を告げる。悔しさを隠そうともせず、道場の床板を一度強く踏み叩いて、黒原はその場を後にした。彼を追って行く侠が何人か居たのを、雪絵や春花も見送る。

雪絵は彼女の記憶にある昔から、自分は強い、という認識がある。それはこの獅士堂の組内で、多くの侠たちと刀を交えるようになって、相対的な実感ともなった。だが、そうであっても雪絵は思うのだ。

(私の刀技は、あの人にはまだまだ届かない)

(あの美には――至らない)

その心の奥に、そして瞳の奥に刻まれた、鮮烈なまでの美しさを宿した刀技。春花の刀技。

華やかさと張りつめた空気が相まった精神性。極限まで鍛えられた一分の無駄も含ませない洗練された業前。それでいて様々な色や風、匂いを感じさせる……春花という温かな 『人』。

それを雪絵は春花の緋色の瞳の奥に言語を超えて感じる。

(あの瞳の奥に息づくモノとは、想いとはどういうモノだろう。私には無い、あの人モノ)

(それがあから、あの人とはとても美しく、強いのかな)

獅士堂の太刀はこの世で最も静かなる刀技。その精神、気構えも、『心静かに在ること』。雪絵は白峰や春花自身の言葉と在り方から、それを教わった。

そして、そう在れば見えるモノがある筈なのだという事も。

自分を救った春花という、人であり武俠を思う時、正直なところ雪絵にはよく解らない。

春花が何を思って、郷に仇なす人斬りだった自分を助け、生かしたのか。そして何故、自分に獅士堂に加わり、娘とならないかと誘ったのか。春花の刀技に魅せられ、惹かれた深い意味も解らないが、現状を作ることになった春花の意図が謎だった。分かっているモノがあるとすれば、春花自身も刀を振るうという生――その道にある事くらいである。

だからだろう、雪絵は時として、春花の事を不可解に思う。

この郷において最強と謳われる武俠であり、完膚なきまでに圧倒的に人を斬

第一章 太刀の音

る——斬れる存在である春花。しかしその彼女は、どこまでも相対する者達に向けての『想い』を強く抱いている。雪絵はこの数か月、春花が実際に生殺与奪の殺陣刃傷に及ぶ場に僅かながら同在し、傍らで視ることで杳とそれを学んだ。

自らの手で葬り去るとはいえ、死に逝く者達に大いに心を割き——心を裂くその様は、どこまでも『人』だと雪絵は思う。武侠というモノを知らず、また純然たる殺し仕事に手を染めていた雪絵だからこそ、そのように思うのかもしれない。

殺し手ではなく、武侠。

刀を振るい生きる者。

それは人斬りでは為せない事なのか。それは人であるから出来ることなのか。それも今の雪絵には解らない。

ただ、武侠である春花は、その心持ちがどこまでも『人』のそれでありながら、しかし誰よりも人を斬ることを厭わない。そういう人斬りでもある。

それを武侠然としている、と言うのだが、今の雪絵には諒解出来るころではない。

そして春花という者は、そんな武侠である己に誇りを持って、この獅士堂一家の頭梁を務めている。

(私にはよくわからない)

何が春花をそうまでさせるのか。

雪絵は少なくとも、今の自分は相手がどんな者であろうとも、それが『人』を斬る事になるのであれば、それに何も感じずにはいられなくはなった。だがそうして心に重みを感じても、それで刀を振るう事を止めようとは思わない。

けれど、自分は人を斬る事で苦しむことさえも、己が誇りとしていけるだろうか？

そう、雪絵は思わされる。

(.....心、静かに)

そう在れば、そのうち何か視えるのかな。

今日の雪絵に出来るのは、そうした気構えだ。そして何より——と鋭く視線を巡らせる。一步、歩み寄る。

第一章 太刀の壱

「.....春花さん、一本、手合せしてよ」

木刀を前面に握り突き出し、雪絵は春花に声を掛けた。慕い、憧れるその人に向けて。

彼女に近づくために。

そうだ。雪絵は、自分が春花の申し出を何故受け入れたかだけは、しっかりと分かっていた。

春花はそんな雪絵を視て、楽しそうに、そしてどこか力を抜いて、こう返すのだった。

「いい加減、『母さん』って読んでくれないかしらね。この子はもう」

武俠の頭であり、『母』でもある春花は、我が子になった『娘』に、そう返すのだった。

.....続く。